

江戸時代の通訳者教育論

— 雨森芳洲の業績を中心に —

大 西 比佐代

Hoshu Amenomori's Interpreter-Training Principles

—What He Expected from Interpreters—

OHNISHI Hisayo

Abstract

Hoshu Amenomori (1668–1755) devoted himself to improving diplomatic relations between Japan and Korea. His basic principle was to “neither deceive nor compete each other, but always be sincere and trustworthy.” One of his achievements is the establishment of Japan’s first interpreter-training school assisted with public funds. He demanded from students not only linguistic abilities but also thoughtfulness, good-nature as well as a high level of education and ethics. He basically identified three factors that he considered necessary to become interpreters. Those are an aptitude with languages, a predilection for language study, and a tolerance to demanding work on a daily basis. Relying on his firm convictions on Confucianism, Hoshu demonstrated flexibility and open-mindedness in seeing the world as it was in the feudal days. His teachings still merit our admiration today.

キーワード：柔軟性、複眼思考、才能、適性、忍耐力

Key words: flexibility, open-mindedness, aptitude, predilection, tolerance

本学非常勤講師

連絡先：大西比佐代 〒662-8505 西宮市岡田山4-1 神戸女学院大学文学部英文学科
h_ohnisi@kcn.ne.jp

はじめに

雨森芳洲（1668-1755）は日本と朝鮮国との間に交隣を説いた先見として近年注目を集めている。しかも、単なる表面的な友好的交流ではなく、相手国の言語による通訳能力まで習得した上で歴史と精神・文化の深い相互理解に基づく交隣をめざした点でも先駆者である。本稿では、芳洲が自らの経験から作り上げた通訳者論と朝鮮語学習法を検討し、どのような通訳者を理想として養成しようとしたかを考察する。

1. 芳洲とその時代

雨森芳洲は、滋賀県に生まれたとされる。京都で医学を学んだあと、18歳ころからは江戸で木下順庵のもと儒学を学んだ。22才から88才で亡くなるまで対馬藩に仕え、徳川幕府の時代に「互ニ不欺不爭真実を以交リ候を誠信とは申候」⁽¹⁾と唱え日本と朝鮮国との交流に大きな影響を与えたが、明治以降の日韓両国の歴史のなかでは「忘れられた思想家」⁽²⁾と言われるようになる。しかし、1990年に韓国の盧泰愚（ノテウ）大統領が来日した際のスピーチで言及したことから、日本でも知名度が高くなった。江戸時代に日本語、朝鮮語、中国語の三ヶ国語に通じた屈指の人物である。

江戸時代は一般に鎖国政策の敷かれた時代である。しかし、この「鎖国」という言葉は幕府が用いた用語ではなく、度々指摘されるようにエンゲルト・ケンペル Engelbert Kaempfer（1651-1716）の書いた『日本誌』（1733年）からの翻訳語である⁽³⁾。幕府が行った政策は具体的には「①キリスト教、特に宣教師の取り締まり、②外国船貿易の統制、③日本人の海外往来の禁止」⁽⁴⁾を指す。そして「鎖国」後も、「諸外国や他民族との恒常的な接触、つまり、長崎における中国商人・オランダ商人との関係、対馬藩を通した朝鮮との関係、薩摩藩を通した琉球・中国（明・清）との関係、松前藩を通したアイヌとの関係などが存在した」⁽⁵⁾のである。こういった相手国のうち、朝鮮王朝（李氏朝鮮）は「対等な交隣関係をもつ国」⁽⁶⁾とされ、貿易だけの関係（通商の国）のオランダや中国とは区別された。その朝鮮国との外交で実際の窓口の役目を対馬藩が果たした⁽⁷⁾。

対馬は面積709平方キロメートルの南北に長い島である。九州の博多からの距離は100キロあるが、釜山からは半分の50キロである。地形的には、300メートル級の山が連なる山がちの島で平地に乏しく、海岸は複雑なリアス式を描く。そのため稲作に適しておらず、古代より朝鮮半島との交易を行った。このことは3世紀前半の『三国志』の『倭書』（＝魏志倭人伝）にすでに「至対馬国、[中略]、所居絶島、方可四百余里、土地山陰多深林、道路如禽鹿径、有千余戸、無良田、食海物自活、乗船南北市糴」⁽⁸⁾と記載されている。

芳洲が対馬藩在任中の1719年、徳川吉宗の将軍職襲位を賀すため朝鮮から派遣された使節団（＝朝鮮通信使）の一員の申維翰も、対馬のことを「土地が瘠薄にして、百物生ぜず、山には耕地なく、野には溝梁なく、居宅には菜畦がないからであろうか。ただ、漁をして市販し」⁽⁹⁾

と日本滞在中に記した日誌『海游録』に書いている。対馬の地勢は3世紀と18世紀とほとんど変わっていないのである。

2. 芳洲の生涯

A. 幼少～青年時代

幼い芳洲は、町医者であった父について京都に移り、12、3才の頃には父と同じく医者になるための勉強を始めている。ところが、「書を学ばば紙を費やし、医を学ばば、人を費やす。」⁽¹⁰⁾という師の言葉に衝撃を受け医学を捨て、江戸に行き儒学に打ち込む。そのとき師となったのが木下順庵（1621-1698）であった。この順庵の下では歴史に名を残す新井白石や室鳩巢などが学んでいる。こういった錚々たる弟子を持つ順庵が「後進の領袖となす」⁽¹¹⁾と述べたほど芳洲は優秀であった。

木下順庵自身も13歳の時の詩が天皇の親覧に供せられたほどの才能を持っており、日本の儒学の開祖である藤原惺窩（1561-1619）の孫弟子にあたる。芳洲は順庵に関して「いかゞして学問は成就し侍るべきやととひしに、師なりし人、みなたちにも恋をし給ふやといへる」⁽¹²⁾という興味深い逸話を述べている。恋するほどの情熱をもてることに、ひと時も忘れないほど没頭できるなら大成する可能性が高いというのである。芳洲は師のこの精神を後に対馬で設立する通訳者養成の学校で生かしている。

順庵は1682年、朝鮮通信使に面会する機会を得ている。そして、教養を誇る一行に大いに賞賛されている⁽¹³⁾。また、日本に亡命後帰化した20歳年上の明の学者朱瞬水（1600-1682）とも十余年に及ぶ交流をもっている。順庵の有能ぶりが伺われる。この朱瞬水が日本人と交流するときには長崎の唐通事が付き添っていたという⁽¹⁴⁾。こういった経験から中国語学習の必要性を痛感した順庵から芳洲は大きな影響を受けた。「余初適長崎、衆咸曰、往年有一閩梨名学海者、以別処人来学唐音。継乃者吾子一人耳。当時無有知音読之甚有益者。唯我木先独能知之。故命東就学長崎」と師の慧眼を称えている⁽¹⁵⁾。

B. 青年時代—語学を学ぶ

1689年に芳洲は順庵の推薦で対馬藩に出仕するが、実際には江戸に残って中国人禅僧のもと中国語の勉強を始めている。このときの中国語の勉強とは、芳洲自身が「もろこしごゑを」⁽¹⁶⁾学んだとしているように、漢文を中国人のように語順通りに読む「音読法」のことで、漢文を正確な理解を目的とした⁽¹⁷⁾。当時の対馬藩は朝鮮貿易が最盛期で財政が豊かであったため、3年後に芳洲は藩の支援で中国語を学びに長崎に行くことが出来た。この長崎での中国語学習に関して芳洲は「二十六歳、適長崎、授業於上野玄貞。」⁽¹⁸⁾と簡単に記すのみであり、玄貞については唐通事⁽¹⁹⁾とする説と医師とする説⁽²⁰⁾と二つあるなどその素性は不明である。芳洲は長崎に計二回滞在しているが、その第一回目は1692年であるから、中国人が唐人屋敷に居住強制されてからわずか3年後である（本稿補論2参照）。芳洲以前に長崎に中国語を習いに來たのは一人しかいなかったというのは前述の通りであるが、当時の具体的な中国語の学習法は不明である。芳洲の後輩たちは、「俗体」という「短髪無刀」になって長崎の南京寺に下宿し、唐

人屋敷に通って学習をしている⁽²¹⁾。武士が商人姿になって、中国語を学んだのである。決意もひとしおであったと思われる。

1693年、26歳の芳洲は対馬の中心地である厳原に赴任した。そして朝鮮との間の交渉ごとに関わるようになると、朝鮮語の学習も不可欠であると考え始める。そのため、1703年から1704年までと1705年の8ヶ月間の二回、釜山にある対馬藩の出先施設に滞在して朝鮮語を学習した。中国語と比較すると朝鮮語の方が日本語と文法が似ているとはいえ、「命を五年縮候と存候ハ、成就せざる道理やあるへき」⁽²²⁾と考え、大変な努力を払って学習している。芳洲のこの努力はすぐに報いられた。三年で、「おほかたつかへなきほどに」⁽²³⁾なり正徳（1711年、将軍家宣襲職祝賀）と享保（1719年、将軍吉宗襲職祝賀）の二回の朝鮮通信使の際には後輩の儒学者松浦霞沼の通訳をするまでになっている。その一方で中国語に関しては、50年間以上毎日学習してもまだ難しいと嘆息している⁽²⁴⁾。

ところで、『海游録』4月30日の記述に、芳洲が「怒気はなはだしく、訳のわからぬこと犬羊の声のごとく」に対馬側の通事を責めたとある。これは芳洲が通訳の拙さに立腹している様子と思われる。家老と通詞にのみ錦服が許されたという「異常の待遇」⁽²⁵⁾の通訳者である。それにふさわしい語学力を期待したのも当然であろう。

さらに『海游録』10月1日に、次のような一節がある。

早暁に持ち来たった儀註は、すなわち倭仮名で書いてしかも乱草、到底明らかにしうるものではない。奉行の言によれば、雨森東 [= 芳洲のこと。筆者注] が病に臥し、他に書を解する者なく、漢文に翻作できないと言う。使者を出し急いで松浦儀 [= 霞沼。筆者注] を招いたが、倉卒たるをもって書し難いということで、辞退した。けだし、倭人の文はおおむね汎然模糊としており、模写するに不十分である。ゆえにみな難色を示すのである。やむをえず、余 [申維翰] と訳官朴春瑞とが、ともに外庁に出て、奉行を招き、その状況を細かく確めて、しかるのち訳して文となし、副使公に告げて回した。

芳洲が病に倒れると誰も「倭仮名」を訳せないというのである。芳洲の同僚の松浦は、芳洲と同じく木下順庵に学んだ俊英であるが、その松浦も、そして、通詞もハングルを書けなかったのである。日本語で科挙に合格した秀才ぞろいの朝鮮側通訳官⁽²⁶⁾に比べ、対馬側の通訳官が多くの点で見劣りがしたことは疑いようがない。

B. 壮年時代—通訳者教育の教師として

対馬藩における通訳者のなり手は、本稿補論1にある通り、六十人衆という特権商人の子孫であった。芳洲は当時の状況を次のように分析した。「これまでは幼少のころより、朝鮮人のなかで立ち回って働くうちに自然にことばを習い覚えた者が通訳に従事してきた⁽²⁷⁾。特に貿易が盛んな17世紀末ごろは朝鮮語の堪能な商人が輩出したため容易に人材の確保が容易であった。ところが、近年 [= 18世紀初頭] 景気悪化により商人の数が減り通訳者のなり手の絶対数が減少した⁽²⁸⁾。そのうえ数少ない優秀な人間はすでに藩の役人に任命されている。残る人材

ではどうにも心もとない⁽²⁹⁾。そもそも言葉さえ話せれば通訳者になれると考えるのは素人判断ではないか⁽³⁰⁾。このままでは近い将来通訳者が不足し藩として大問題となるだろう⁽³¹⁾。」

事態を憂えた芳洲は、1720年通詞を系統的に養成する学校の必要性を藩に建議した。特筆すべきは芳洲が語学力のみならず、通詞となる人間に人柄、知性、教養、道義心までも求めたことである。長崎の唐通事も語学力だけではないとされたが、それは本稿補論3にあるように航海技術といった別のスキルも習得する必要があったからである。なお、長崎に来航する中国船には日本語の通訳官が乗船していなかった⁽³²⁾。唐通事には中国側の通訳者と比較される場はなかったのである。

C. 芳洲の教育方針

学校形式で通訳者を養成するという芳洲の案は、対馬藩が財政難に陥ったことから実に7年も論議され1727年にやっと実現した。「韓語司」が開校したのである。なお、同様の通訳者養成の学校が、日本の「海外に開かれた南の窓」⁽³³⁾であった琉球王国にも設立されている。琉球王国は江戸時代を通して中国とも朝貢関係を維持していた。そのため江戸時代を通してほぼ二年に一回の割で200人ほどの使節団が琉球から中国を訪問している。さらに、この使節団のうち20名ほどは北京にまで上京したが、こういう際には中国側も通訳を用意した⁽³⁴⁾。琉球王国の通訳者は、明の洪武帝の時代（十四世紀）に集団で移住した閩人三十六姓と呼ばれる中国人集団の子孫が一貫して担当していた⁽³⁵⁾。しかし、定期的に、多数の使節団が中国に派遣されたことから、琉球でも通訳者を養成する必要がおり、1718年に養成施設「明倫堂」が創建されている。これは、韓語司より前であるが、当時の琉球王国は日本とは別の国であったため⁽³⁶⁾、韓語司が「日本最初の外国語学校⁽³⁷⁾」であり、日本最初の通訳者養成学校であった。

芳洲は韓語司の入学資格を「六十人之子弟、十三歳以上十五歳まで」⁽³⁸⁾とした。対馬ではそれまで六十人衆の中から通詞を調達する伝統があったことは前述の通りである。この時、通詞の人選などの管理は町奉行が行っていた点を泉澄一氏が指摘している⁽³⁹⁾。しかし、多くの絵巻物に描かれた通詞は、皆帯刀した武士の装束である⁽⁴⁰⁾。したがって、通詞になれば町人身分のままであっても名字帯刀が許されたということだ。たとえ通詞になれなくても別代官または町代官になれる道もひらけた⁽⁴¹⁾。そのため、対馬來島以前は武士であった六十人衆にとって子弟の韓語司入学はとりわけ魅力的だったのではあるまいか。なお、長崎唐通事も、絵図には帯刀した武士の姿で描かれている⁽⁴²⁾。

このように入学資格に一定の制限があったとはいえ、芳洲は、語学が好きかどうかといった性向から人柄・才能・教養・道義心まで兼ね備えていないと本当に役に立つ通詞にはなれないと考えた。つまり、通詞の子であっても通詞に向いていない場合があるとしたのである。芳洲自身はこの点について次のように書いている。

しかし芸と申ものは重キ芸ほと生付得方ニ御座候而、其上すき候とつとめ候と、此三ヶ条揃不申候而ハ、上手ニ成可申様決無之事ニ而、その親しかなりとて其子又しかなるへきにあらす⁽⁴³⁾。

芳洲がこう考えていたからこそ、対馬では通詞役が長崎のような役株（＝家筋）制度となることがなかった。そして、1761年には大工の次男が韓語司に入学を許されている⁽⁴⁴⁾。芳洲の理想がついに実現したのである。そのうえ、芳洲は生徒の謙虚さも重視し、「すこしおほへたるとて」⁽⁴⁵⁾慢心すれば大成は難しいため、横柄な人間のことを「いよいよまなびて、いよいよあしし」⁽⁴⁶⁾と戒めている。したがって、科擧の制度には批判的で⁽⁴⁷⁾、成績だけで人選した場合、人柄まではわからないと注意を促している⁽⁴⁸⁾。

D. 韓語司での学習

芳洲が韓語司のために作成したカリキュラムは下記のようなものである。

1. 毎日東向寺へ通候而、『小学』『四書』『三体詩』などの読書⁽⁴⁹⁾
2. 朝鮮音で『類合』『十八史略』を暗誦⁽⁵⁰⁾

『小学』や『四書』は当時小児の教育に最もよく用いられた教科書である⁽⁵¹⁾。したがって、韓語司入学の時点で学生たちはすでに学習していたことになる。まずそういった漢籍を僧侶とともに読み直し、儒学の基礎的教養を確かにすることを目指したのであろう。

次に、朝鮮語の学習として、『類合』⁽⁵²⁾と『十八史略』を使用した。『類合』は漢字にハングルで読み方を記した辞典であり、これを用いてハングルに親しませるのである。芳洲はハングルを日本の仮名のように民族固有の文化と重視した⁽⁵³⁾。直接朝鮮の人々と交流する対馬藩にいたため漢文を偏重した当時にハングルを重視したのである。松浦霞沼はハングルが読めなかったため、藩での仕事に差し支えたという⁽⁵⁴⁾。

『十八史略』も当時の多くの教育施設で用いられていた⁽⁵⁵⁾。したがって、これも韓語司入学以前に学習されている可能性が高い。このように内容の分った書籍を朝鮮音で読むことで朝鮮語文法を理解させようとしたのである。

中級レベルに導入された教材は『物名冊』『韓語撮要』『淑香伝』⁽⁵⁶⁾である。このうち『物名冊』は題名から単語集と推測されるので、これにより語彙の増強を図ったのだろう。『淑香伝』は芳洲自身が留学中に書写したと『詞言葉稽古之仕立記録』に書いており、小説と思われる。当時は書き言葉と話し言葉の違いが今よりも大きかったので、小説が会話能力の学習に欠かせなかったのだ。

発音に関して芳洲は、中級用の著書『全一同人』の序文のなかで、単語を「言い分ける」ことの大切さを力説している。そして、同じ漢語でも日本と朝鮮とで意味が違う場合があることや、同じ単語が地域によりアクセントが違う場合がある点まで見抜いている⁽⁵⁷⁾。

芳洲自身がいかにハングルを学習したかについて詳細はわからないが、『朝鮮国諺文』というハングルの一覧表が参考になる⁽⁵⁸⁾。これはハングル160字とカタカナによる発音の一覧表で、1714年に伊藤東涯（1670-1736）が対洲雨森氏から借りて書写したものである。芳洲と東涯との交友については中村幸彦『雨森芳洲とその交友』に詳しい⁽⁵⁹⁾。

なお、当初芳洲が韓語司の開設を考えたのは釜山であったが、実際に建てられたのは対馬で

ある。学生たちは対馬で三年間学習し、成績優秀者数名が釜山に派遣される稽古通詞に選ばれた。

その際の選定条件⁽⁶⁰⁾としては、

1. 平常点が良い
2. 最終試験の成績も良い
3. 病身あるいはその他の支障がない
4. 人柄が良くて、有望である。
5. 本人も希望している

などの点が考慮された。平常点に関してはすでに研究されているように⁽⁶¹⁾、出席点に加えて、定期試験で常に高得点を取ることが求められた。努力家であるかどうか重視されたのである。最終試験は、「壺人ツゝ召寄セ言葉をも承り、諺文をも書セ」⁽⁶²⁾る個人面接方式で行われた。次に健康問題を取り上げているのは、病弱であった芳洲自身や、喘息のため釜山への留学ができなかった松浦霞沼⁽⁶³⁾のことが頭にあったと推察できる。「その他の差し障り」というのは、家業を継ぐ必要のある嫡子がどうかである。さらに、義理をわきまえ、上の事を大切に思う誠実な人柄であるかどうか評価された。これに関しては1723年に対馬藩から長州藩に移った小松原権右衛門の例がある⁽⁶⁴⁾。小松原は芳洲と同じく正徳と享保の2度の通信使に通詞として江戸まで行った力量と経験の人物であるが、朝鮮人参密輸事件に連座し通辞職を剥奪されたという。対馬藩が通詞職に能力よりも誠実さを優先させたことがよくわかる⁽⁶⁵⁾。そして、最後の条件が、本人がそれを望んでいるかどうかであった。対馬ではこのように選抜する制度が明確にされていた。「長崎向之通詞とは格別違候事ニ御座候」⁽⁶⁶⁾と芳洲が自負する所以である。

芳洲は、漢文を語順どおりに読むことに力を入れたことはすでに述べた通りである。著名な日本学者ドーア（Ronald Dore, 1925-）は中国語を近代語学として研究した日本人として岡島冠山（1674-1728）と雨森芳洲の二人を挙げている⁽⁶⁷⁾。荻生徂徠（1666-1728）も「原典を本来の中国語の語順で」⁽⁶⁸⁾で読んだ。この「漢文直読論」が芳洲と徂徠の二人の仲を深めたともされる⁽⁶⁹⁾。漢文を語順どおりに読んで普通の言葉に訳すと原文の細かいニュアンスが伝わり一回聞いただけでも意味がわかりやすいと芳洲は考えた⁽⁷⁰⁾。これはまさに現代の通訳教授法で推奨されるサイトトランスレーション（初見訳）である。芳洲の現代的なセンスが伺われる。

芳洲の語学センスは生徒を4人ごとのグループにし、定期的にディスカッションをさせた点にも表れている⁽⁷¹⁾。このときリーダーはテーマを前もって事前に全員に連絡しておくことが求められ、ディスカッションの後には内容を書き留めて教師に提出している。こういった周到で綿密なカリキュラムを通して朝鮮語の運用能力を伸ばそうとしたのである。

補論 1. 日本と朝鮮半島との関係（略史）

A. 古来から14世紀にかけての日朝関係

漢字や仏教が朝鮮半島の百済から伝わってきたように、古来より日本は朝鮮半島と頻りに交流を行ってきた。663年の白村江の戦いで百済とともに新羅・唐と戦い敗れてはいるが、その後の朝鮮半島を統一した新羅、唐、さらに新興国の渤海とも相互に交流している。こういった交流を表にすると次のようになる。

表 古代における日本と中国・朝鮮半島との交流

隋	遣隋使	600～614年	5回	長期留学
	隋使		1回	
唐	遣唐使	630～894年	計画20回、実施16回、 長安までは13回	669～701年は中止。7世紀120人乗り2隻。ほぼ20年に一回派遣
	唐使		8回	唐側の関心薄い
新羅	遣新羅使	676～882年	29回	
	新羅使	676～840年	40回	
渤海	遣渤海使	728～810年	13回	
	渤海使	727～929年	35回	

『最新版日本史辞典』（1997角川書店）ならびに『東アジア世界と日本』（2004）青木書店）から筆者作成

その後の中国との関係を見ると、10世紀末から13世紀後半にかけて日宋貿易が盛んになるが、1274年と1281年に蒙古が高麗軍と共に日本を攻め（文永・弘安の役）、それまでの良好な関係が崩壊した。朝鮮半島では高麗（918～1392）の支配後の1392年に朝鮮王朝（李氏朝鮮）が起こった。朝鮮王朝は、両班（文官と武官）を支配階級とする中央集権的官僚国家を形成し、明の皇帝の冊封を受けた。さらに活発化する倭寇取締り政策として、日本に対し様々な貿易統制策を実施した。その中には、日本からの交易者の受け入れ場所や受け入れ施設（倭館）の建設、受図書人・受職人制度、文引制度などの諸制度の整備、癸亥約定（1433年）・壬申約定（1512年）などの条約制定がある。こういう流れの中で対馬が対朝鮮貿易の唯一の窓口となるのである。

B. 15世紀～江戸時代の日朝関係

15世紀に豊臣秀吉が朝鮮に出兵した文禄・慶長の役の際には、日本各地の大名の要請にこたえて対馬から通訳者が、総計46名派遣された。そして、それだけの人数を派遣してなお対馬の島主である宋義智は10名の通訳者を確保できたという⁽⁷²⁾。これは前述のような朝鮮側の取った貿易統制策の結果、「朝鮮との通交・貿易の実権が、対馬に集中していたので、朝鮮語のわかるのは、ほとんど対馬島の人びとに限られていた」⁽⁷³⁾からである。通訳者として働いた「六十人衆」あるいは「六十人商人」は、対馬藩主の家系である宋氏がまだ九州にいたころの家臣団であり、土地の狭い対馬に移住した際、田禄の代わりに特権を許された商人となった一団であった⁽⁷⁴⁾。

その後、徳川家康は、明との国交樹立を目指し、まず朝鮮との国交回復に努めた。その結果1607年朝鮮から使節団が日本にやってきた。これが朝鮮通信使である。この使節団は1811年までの約200年間に12回、ほぼ毎回400人を超える規模で来日した。そして、半年をかけて対馬から大阪を通り上京し、将軍にお目通りしたのである。この使節団に対馬藩藩士が世話役や通訳として大勢随行したのである。幕府もその接待に非常に気を配っている。幕府の歳入が76～77万両という時代に、一回の使節を迎える総費用が百万両であったという⁽⁷⁵⁾。芳洲は第8回（1711年）と第9回（1719年）の2回に随行した。

補論2. 唐人屋敷

江戸時代の長崎は、「鎖国」体制のもとオランダ人と中国人との貿易を一手に管理する港であった。中国人は当初広く長崎の街中に日本人に混じって生活していた。1661年の中国清朝の遷界令（商人、船舶の渡航禁止令）以降、長崎に来航する中国船は年平均20艘ほどであったが、1684年に遷界令が解除されると中国船の入港が激増し、わずか4年後の1688年には193艘も来航した⁽⁷⁶⁾。このように急増する日中貿易により金銀が海外に流出することを恐れた幕府は、中国人と日本人との接触を制限するため総面積が3万平方メートルの一種の隔離施設を建設する。これが唐人屋敷である。そして、1689年からは来航する中国人に唐人屋敷への居住を強制した。唐人屋敷の正面には二重に門（大門と二の門）があり、入館できる人間はきびしく制限された⁽⁷⁷⁾。大門と二の門との間の広場には、唐人向けの市が立てられたので、長崎の役人と商人のみが入れたが、この役人の中に通事が含まれる⁽⁷⁸⁾。この広場には乙名部屋⁽⁷⁹⁾という役人用の詰め所があった。二の門内に入れるのは、遊女、大工、医者、人夫などに限られていた⁽⁸⁰⁾。また唐人が外出できるのも、貿易業務や宗教行事に限定され、日本人との自由な往来が禁止された⁽⁸¹⁾。

『訳司統譜』によると、長崎の唐通事の起源は1603年とされ、初代は中国人であった⁽⁸²⁾。二代目以降は日本人風に改姓したが、代々中国人家筋が通事職を継いでいる⁽⁸³⁾。通事の職は「名跡すなわち役株の相続」⁽⁸⁴⁾として継承されたのである。そのため、唐通事は各自家庭で嫡子に幼少時から中国語に親しませた。

補論3. 通訳官の歴史（概略）

（A）日本における通訳官の起源

ここで、「通訳者」について考えてみたい。日本人が中国や朝鮮半島の人々と意思疎通を行う場合には古代より常に通訳者が必要であった。通訳者は「オサ」と呼ばれ、漢字では「訳語」「通事」「日佐」と書かれた⁽⁸⁵⁾。『続日本紀 養老天皇三年十一月条』に、大陸系の工人である才伎（てのひと）のなかに陶部・鞍部・画部・錦部と並んで「訳語」が出てくる。『続日本紀 聖武天皇天平二年（730年）』では、「又諸蕃異域。風俗不同。若無訳語。難以通事。仍仰粟田朝臣馬養。播磨直乙安。陽胡史眞身。秦忌寸朝元。文元貞等五人。各取弟子二人令習漢語者。」とあるように、中国語の通訳者養成策が取られ

た。『日本書紀 天武天皇九年（680年）十一月』や『続日本紀 淳仁天皇天平寶字四年（760年）八月』によると、日本語を学ぶ新羅からの留学生を受け入れていたことがわかる。

(B)「通事」と「通詞」

中国の王朝が、四方の異民族を東夷・南蛮・西戎・北狄と名づけたのは有名であるが、さらに異民族ごとに通訳官の名称も区別していた⁽⁸⁶⁾。つまり、通訳官の名称が言語ごとに変わったのである。江戸時代の長崎でも、阿蘭陀の場合は通詞、唐の場合は通事という様に通訳官の名称が変わっている⁽⁸⁷⁾。なお、現代の発音では「事」も「詞」とちらの表記でも発音は「つうじ」となりうるが、「通詞」の方は「つうし」と読まれた可能性もある。

なお、この「通事」と「通詞」という名称が違う理由を、阿蘭陀向けの場合は語学力しか求められないが唐通事の場合には操舵技術など船舶関連事項全般にまで精通する「事」が求められたためとするのが現在の通説である⁽⁸⁸⁾。推古天皇が始めて使わした遣隋使小野妹子の通訳官は渡来人系の鞍作福利だったが、役職名は「通事」であった。この古代の習慣が続いていたとも考えられる。

いずれにしろ、中国語の場合は琉球王国や薩摩藩でも唐通事と呼ばれている。薩摩藩には領内に漂着する朝鮮人に対応するため朝鮮語の通訳官も存在し、その職は苗代川流域に住む李家という朝鮮人一族が世襲した⁽⁸⁹⁾。当時の資料を調べると、朝鮮語通訳官も「通事」とされている場合が散見される⁽⁹⁰⁾。芳洲はその著書でほとんど一貫して「通詞」という言葉を使用しており、「通事」ということばはあまり使用していない。「みる」という動詞に当てはまる漢字を見・視・観・覧など九種類も列挙して微妙な違いを述べている芳洲⁽⁹¹⁾であるが、この「通事」と「通詞」の違いに関しては説明していない。これについては今後の研究課題としたい。

結 語—芳洲の業績についての考察

韓語司に関し現存する記録は非常に少ない。しかし、江戸末から明治初めの資料とされる『韓語稽古規則』⁽⁹²⁾は、学生たちが熱心に勉強を続けた様子を伝えている。また、薩摩藩では1828年に朝鮮語の通訳が不足したため、対馬藩から朝鮮語通訳の教師を招いている⁽⁹³⁾。韓語司設立から100年経っても、対馬藩は通訳教育の教師を他藩に派遣することが出来たのである。韓語司は立派に芳洲の精神を受けついたのである。

このように大きな芳洲の精神の特徴としては、まず順応性に富んだバランス感覚があげられる。芳洲の著書『一字訓』は1693年に生まれた幼少の藩主に次代の長としての心得を教えるべく漢字一字ずつを挙げてその意義をやさしく説き明かしたものであるが、その「寛」⁽⁹⁴⁾の項に次のようにある。

モノニハユタカニイタシタルがヨキコトモアリ、マタキツトイタシタルガヨキコトモコレアリ候ユヘ、ヒトスジにオボヘ候ハ、春ヲシリテ秋ヲシラズ、仁ヲシリテ義ヲシラヌ同然ニテ、一方ニカタヨリヨロシカラズ候。

つぎに、その複眼思考が挙げられよう。芳洲は京都・江戸・長崎・対馬・釜山とさまざまな場所に住んだ経験を持ち、3つの国の言語・文化・風習、人々の考え方の違いまでも理解していた。そのうえ貿易の実務、商売の機微から外交における社交儀礼までも経験しており、儒学者としての学問も豊かであった。だからこそ、「よのなかはあひもちなり」⁽⁹⁵⁾と見抜いたのだ。広い教養を重んじる一方、定見をきちんと持つことの大切さも指摘している⁽⁹⁶⁾。定見がない浅学者は、時代の「浮言新説」⁽⁹⁷⁾に振り回されてしまうからだ。

江戸時代に比べ、現代はグローバル化が進展し、世界の人々とコミュニケーションの必要性がますます多くなっている。そのため、深い意味を正確に伝えることのできる通訳者へのニーズは大きくなるばかりだ。一般に、外国語を使う能力さえあれば通訳者となれると思われがちであるが、そうではないことはすでに芳洲が説いた通りである。幅広い教養や倫理観、人柄まで兼ね備えてこそ真のコミュニケーションの手助けができるのである。現代の通訳者教育に関わる人間もこの芳洲の精神に学んでこそ、多彩に活躍できる次代の通訳者を教育できるのではないだろうか。

注

- (1) 雨森芳洲『交隣提辭』（泉澄一編『芳洲外交関係資料書翰集—雨森芳洲全集三』関西大学出版部、1982年）、p82。
- (2) 上垣外憲一『雨森芳洲』中央公論社、1990年、p8。
- (3) たとえば、右記参照。荒野泰典「海禁と鎖国」『アジアの中の日本史Ⅱ外交と戦争』（荒野泰典・石井正敏・村井章介編）東京大学出版会、1992年、p193。
- (4) 朝尾直弘・宇野俊一・田中琢編『最新版日本史辞典』角川書店、1997年、p438。
- (5) 鶴田 啓「近世日本の四つの「口」」（『アジアの中の日本史Ⅱ外交と戦争』所収）1992年、東京大学出版会、p297
- (6) 鄭章植『使行録に見る朝鮮通信使の日本観』明石書店、2006年、p3。
- (7) 本稿補論1「日本と朝鮮半島との関係（略史）」参照。
- (8) 外山幹夫『資料で読む長崎県の歴史』清文堂、1993年、p13。
- (9) 申維翰『海游録』姜在彦訳注、平凡社＜東洋文庫＞、1974年、p35。
- (10) 雨森芳洲『橘牕茶話』（日本随筆大成編輯部編『日本随筆大成第2期7』吉川弘文館、1974年）、p380。
- (11) 原念斎『先哲叢談』平凡社＜東洋文庫＞、1994年、p292。
- (12) 雨森芳洲『多波禮草』（日本随筆大成編輯部編『日本随筆大成第2期13』吉川弘文館、1974年）、p227。
- (13) 竹内弘行「木下順庵」『叢書・日本の思想家⑦木下順庵・雨森芳洲』明德出版社、1991年 pp93-96。
- (14) 上垣外憲一 前掲、p60。
- (15) 雨森芳洲『音読要訣抄』（竹内弘行・上野日出刀著「叢書・日本の思想家⑦木下順庵・雨森芳洲」前掲）、p256。
- (16) 『多波禮草』前掲、p234。
- (17) 『音読要訣抄』p255。

- (18) 同上、p256。
- (19) 泉澄一『関西大学東西学術研究所叢刊10 対馬藩儒雨森芳洲の研究』関西大学出版部、1997年、p 107。
- (20) 上垣外憲一 前掲、p66。
- (21) 泉澄一 前掲、p395、504。
- (22) 『詞稽古之者仕立記録』（泉澄一編『芳洲外交関係資料書翰集一雨森芳洲全集三』関西大学出版部、1982年）、p308。
- (23) 『多波禮草』前掲、p234。
- (24) 『橘臆茶話』前掲、p416。
- (25) 小倉進平「釜山に於ける日本の語学所」（『歴史地理 第63巻第2号』所収）1934年、p73。
- (26) 李元植『朝鮮通信使の研究』1997年 思文閣 p452。
- (27) 『詞稽古之者仕立記録』前掲、p301。
- (28) 同上、p302。
- (29) 同上、p303。
- (30) 同上、p305。
- (31) 同上、p281。
- (32) 大庭脩 前掲、p171。
- (33) 真栄平房昭「海外に開かれた南の窓—琉球の視点から」『「鎖国」を開く』[川勝平太編]同文館、2000年、p35。
- (34) 喜舎場一隆『近世薩琉関係史の研究』国書刊行会、1993年、p649。
- (35) 喜舎場一隆 前掲、pp652-653。
- (36) 真栄平房昭「琉球使節の江戸上り」『東アジア世界と日本』[歴史教育者協議会編]青木書店、2004年、p99。
- (37) 趙眞璟・松原考俊「日本最初の外国語学校「対馬藩『韓語司』」『対馬新考』、(株)梓書院、2005年。p 149。
- (38) 『韓学生任用帳』（泉澄一編『芳洲外交関係資料書翰集一雨森芳洲全集三』関西大学出版部、1982年）、p22。
- (39) 泉澄一 前掲、p37。
- (40) 責任編集辛基秀、仲尾宏『大系朝鮮通信使 第八巻辛未・文化度』明石書店、1993年、p16。
- (41) 『詞稽古之者仕立記録』前掲、p282。
- (42) 『長崎唐館図集成』前掲 p93、p117
- (43) 『詞稽古之者仕立記録』前掲、p304。
- (44) 『朝鮮詞稽古任用帳』（泉澄一編『関西大学東西学術研究所資料集刊11-4 続芳洲外交関係資料集』関西大学出版部、1984年）、p139。
- (45) 雨森芳洲『全一道人序』（安田章『全一人の研究』京都大学国文学会、1964年）、P80。
- (46) 『多波禮草』前掲、p217。
- (47) 同上、p218。
- (48) 『韓学生任用帳』前掲、p22。
- (49) p23。
- (50) p25。
- (51) R. P. ドーア『江戸時代の教育』松居弘道訳 岩波書店、1996年、p132および雨森芳洲『公私考之式』芳洲会、2000年、p1とp8。
- (52) 国会図書館蔵
- (53) 『多波禮草』前掲、p232。
- (54) 泉澄一 前掲、p241。
- (55) ドーア 前掲、p132。
- (56) 『韓学生任用帳』前掲、p25。

- (57) 雨森芳洲『全一道人序』前掲、pp78-80。
- (58) 『朝鮮通信使と江戸時代の人々』天理大学附属天理図書館、1989年、図21。なお、本資料の存在については、高月町立観音の里歴史民俗資料館主幹（学芸員）の佐々木悦也氏にご教唆いただいた。ここに感謝する次第である。
- (59) 中村幸彦「雨森芳洲とその交友」（『天理大学学報 15号』所収）天理大学
- (60) 『詞稽古之者仕立記録』前掲、p284。
- (61) 田代和生「対馬藩の朝鮮語通詞」『史学』1991年、60巻4号、pp74-76。
- (62) 『詞稽古之者仕立記録』前掲、p300。
- (63) 泉澄一 前掲、p258、295。
- (64) 池内敏『近世日本と朝鮮漂流民』1998年 p70。
- (65) ただし、この人物に関しては別の意見もある。小川亜弥子「長州藩の朝鮮通詞と情報—中島治平の動向を中心として—」岩下哲典・真栄平房昭編（『近世日本の海外情報』岩田書院、1997年、）p260。
- (66) 『詞稽古之者仕立記録』前掲、p305。
- (67) ドーア 前掲、p123。
- (68) 同上、p124。
- (69) 中村幸彦 前掲、p25。
- (70) 『音読要訣抄』前掲、p256。
- (71) 『詞稽古之者仕立記録』前掲、p309。
- (72) 田代和生「補論 1 貿易商人「六十人」について」『近世日朝通交貿易史の研究』創文社、1987年、p421。
- (73) 中村栄考『日鮮関係史の研究 中』吉川弘文館、1969年、p140。
- (74) 田代和生 前掲、p423。
- (75) 吉野誠『東アジア史のなかの日本と朝鮮』明石書店、2004年、p185。
- (76) 大庭脩「長崎唐館の建設と江戸時代の日中関係」『関西大学東西学術研究所資料集刊 9-6 長崎唐館図集成』[大庭脩編] 関西大学出版部、2003年、p169。
- (77) 藪田 貫「唐館の内と外—「唐人番日記」について」（『長崎唐館図集成—関西大学東西学術研究所資料集刊九一六』所収）2003年 関西大学出版部 p227。
- (78) 同上、p229。
- (79) 同上、p226。
- (80) 同上、p229。
- (81) 同上、p232。
- (82) 外山幹夫『資料で読む長崎県の歴史』清文堂、1993年、p224。
- (83) 林陸朗「長崎唐通事の職制と役株」（『近世国家の支配構造』所収）1986年 雄山閣、p5。
- (84) 林陸朗 前掲、p24。
- (85) 遠山美都男「日本古代の訳語と通事」『歴史評論』校倉書房、1998年2月号、p58。
- (86) 同上 p60。
- (87) 三浦梅園「帰山録」『天文・物理学家の自然観—日本哲学全書第8巻』第一書房 1936年、p193。
- (88) 徳永和喜『薩摩藩対外交渉史の研究』（財九州大学出版会、2005年、p374。
- (89) 同上、p380。
- (90) 同上、p374。
- (91) 『橘窓茶話』前掲、p356。
- (92) 長崎県立対馬歴史民俗資料館所蔵宗家文庫 H-9
- (93) 徳永和喜「薩摩藩の朝鮮語通詞」『近世日本の海外情報』前掲、p255。
- (94) 雨森芳洲『一字訓』森銃三・北川博邦編『続日本随筆大成4』吉川弘文館、1979年、p25。
- (95) 『多波禮草』前掲、p190。
- (96) 同上、p197、199。
- (97) 『交隣提醉』前掲、p83。

<参考文献一覧>

- 上垣外憲一『雨森芳洲』中公新書、1989年。
荒野泰典『近世日本と東アジア』東京大学出版会、1989年。
仲尾宏『朝鮮通信使と徳川幕府』明石書店、1997年。
湯沢質幸『古代日本人と外国語』勉誠出版、2001年。
吉田光男編『日韓中の交流 ひと・モノ・文化』山川出版社、2004年。
嶋村初吉『対馬新考』梓書院、2004年。
伊東尾四郎「雨森芳洲遺事」『歴史地理』（16巻5）日本歴史地理学会、1910年。
森 銃三「雨森芳洲のことども」『書物同好会報』（8号）書物同好会、1940年。
神田喜一郎「朝鮮と雨森芳洲」『世界人』（7号）世界人社、1940年。
外山幹夫『長崎奉行』中央公論社＜中公新書＞、1988年。
米谷均「対馬藩の朝鮮通詞と雨森芳洲」『海事史研究』第48号、1991年。
永留久恵『雨森芳洲』西日本新聞社、1999年
『日本書紀（三）』『同（四）』『同（五）』岩波書店＜岩波文庫＞、2006年。

（原稿受理 2007年3月20日）